

名古屋生まれの九十七歳のチェリスト、青木十良の記録映画「自尊(エレガンス)を致の響きにのせて」が八月四(十七)日、名古屋・駅西のシネマスコーレで上映される。九十歳を超えてチェロ曲の最高峰に向き合う虚心の光跡が感動の連鎖を呼び、パッパ「無伴奏チェロ組曲」CD集に続き、「伝記が出版され、映画にもなった。」

97歳チェロ奏者・青木十良

知る人ぞ知る存在だったが、プランクが長く、埋もれていた。

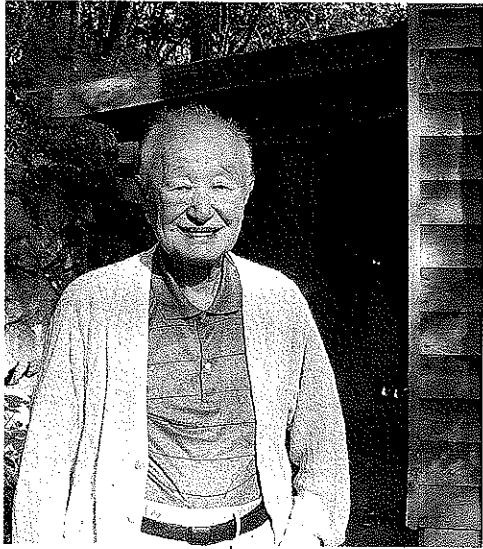
再び脚光を浴びるきっかけとなったのは二〇一二年。パッパの「無伴奏チェロ組曲第六番」を米寿(数え八十八歳)記念でCD発売した。新聞や音楽雑誌に賞賛記事が載り、往年の名手復活が驚きをもって迎えられた。

昨年、伝記「チェリスト、青木十良」(飛鳥新社)を出版した編集者大原哲夫さんは「米寿記念のコピーに驚いてCDを買って聴いてみたら、空気を震わせるような興味あふれた音色に魅惑された」という。五年がかりで取材し二百二十六ページの伝記にまとめた。

第二作となる第五番のCDを九十一歳で発売した。これを契機に、映像番組制作会社が動きだす。今春、記録映画を完成させた「メディア・ワン」プロデューサーの牧弘子さんも感動の連鎖に加わった一人。指揮者の小澤征爾やケント・ナガノらも音楽関連ドキュメンタリーの制作に携わってきた。

「一見、人に優しい好々爺に見えるが、目の光は厳しい」。映画は、長いチェロ人生で到達した「エレガンス」

米寿過ぎ開花 感動の連鎖



「この山荘に皇太子時代の天皇ご一家が訪ねられたことありません」と話す青木十良＝長野県茅野市で

「自尊」という信条を軸に、第四番に取り組む九十年代の六年間を追った。

CDで脚光、伝記や映画に

むの木学園「團長の宮城まり子との再会を締め、忍び寄る老いと闘いながら、パッパの高みへのぼっていく孤高の姿を追う。どんな境遇にあっても、前向きに生きよう。そんな勇気がわく映画だと思っ」

音楽プロデューサー西脇義訓さんは、十年かけてCD三作を手掛け、再評価の輪を広げてきた。「青木さんの音楽、人生は誇張や虚飾とは無

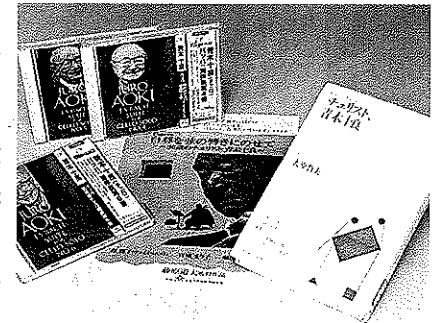
縁。カミのない弓使いで音を遠く軽やかに飛ばすチェロ奏法が紡ぎだす音楽は、エレガンスを求め続けた音楽人生の結晶」と話した。

「翁にして童。そんなCDのコピーが、びったりの九十七歳だった。東京を離れ夏場二カ月間を過す長野県茅野市、藝科高原の山荘を訪ねた。「十五歳のころ僕はね、初来日したバイオリンスト、シ

ゲティの公演を聴きに行き、そのまはゆいばかりの輝かしい音色に打ちのめされました。あんな演奏ができる人間になりたい。その理想の音を生涯追い求めました」

一九二五年、名古屋市区の江川(地下水路化され、現在は名古屋水道江川線)沿いに屋敷があった貿易商青木錠太郎を父に生まれた。両親を九歳で亡くし、上京して兄弟

「エレガンス」追求



出版、上映が相次ぐ青木十良のCDや伝記、記録映画のちらし

の家を転々。「孤児同然でしたね」と回想する。

原子物理学者の夢を絶たれ、軍事教練に反発して開成中学を中退した失意の日々。チェロの名匠クレメンゲルの弟子だったドイツ人商社マンに習い、チェロ奏者鈴木三雄に師事し音楽にのめりこむ。

山田耕柝、近衛秀麿に師を認められ、戦後はフリーのチェロ奏者としてラジオ局やコンサートを掛け持ちし、皇室のチェロ教師にもなった。

六十二歳で名器ステファノ・スカランペラを手に入れた。「このチェロなら、シャパンの泡のようににはじけ、わりと宙を舞うような音が奏でられる」。独自の奏法に磨きかけた。「人生五十、六十代は勉強の時期。七十代はさらに完成を目指し、七十、八十代で開花したらいい」

パッパの音楽には泥の中をのたつ民の苦しみも、天に昇る救いもある。研さんを重ね心を磨き「無伴奏チェロ組曲をばちばち録音する自信がついた」という八十年代後半、「だれか録音してくれる人

を連れてきて」。そのつづきが「遅咲きの花を咲かせた。ただ、無伴奏チェロ組曲の全六曲完成は道半ば。もう人前で演奏は無理。のんきに構えずすぎましたかな」。温顔

にあきらめの色がにじんだ。映画は93分。監督・撮影は藤原道夫。各日午前10時半から。◎シネマスコーレ 電052(452)6036